

北方町文化財報告書第6集

は や ひ の み わ

速日峰地区遺跡Ⅲ

平成4年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1993年3月

宮崎県東臼杵郡北方町教育委員会

速日峰地区遺跡Ⅲ 正誤表

頁	行	誤	正
1	3	照会のを	の照会を
4	13	角礫 <u>焼石</u> が	角礫が
6	8	6 <u>で本</u> あった。	6 <u>本</u> であった。

序

北方町教育委員会では、東臼杵農林振興局の委託を受けて、平成2年度から早中・早下地区内に所在する速日峰地区遺跡の発掘調査を行っています。今年度は、諸般の事情から早中地区の1ヶ所を調査致しました。

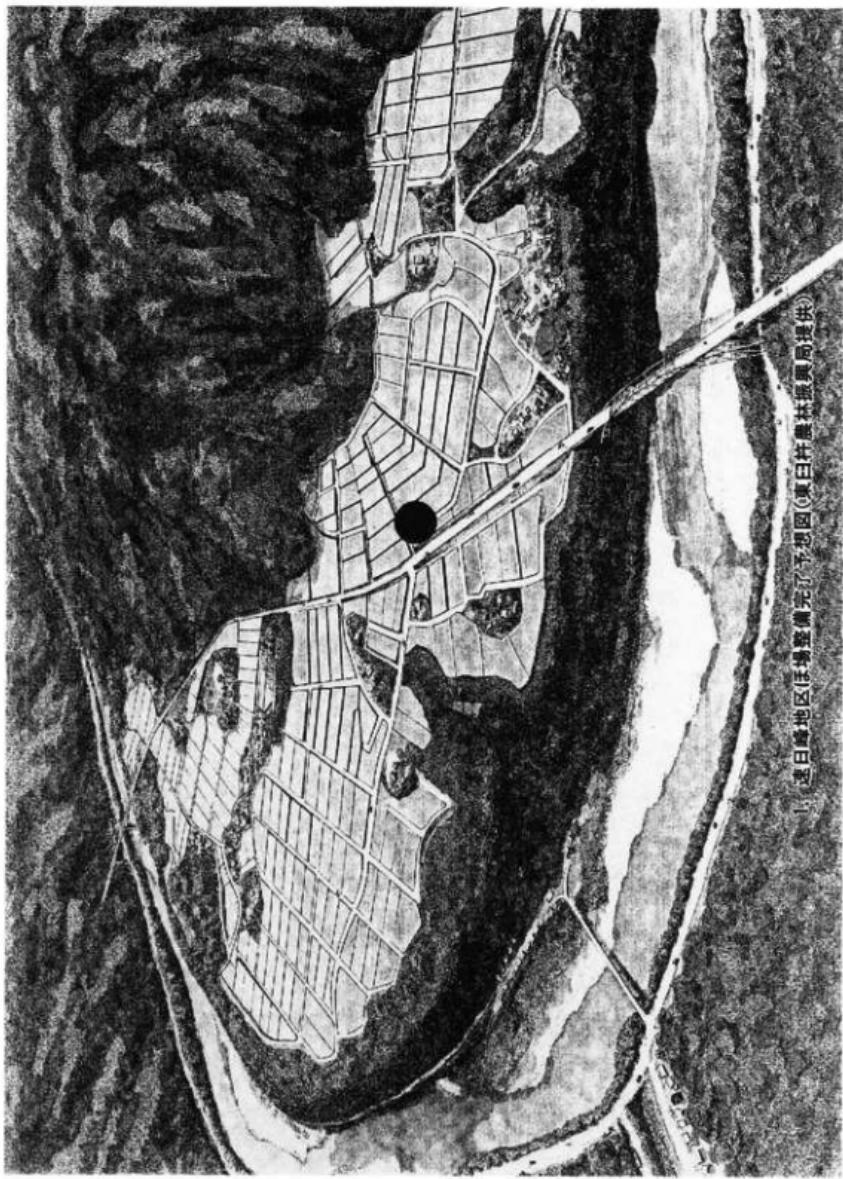
調査の結果、縄文時代の焼石群や中世の五輪塔をはじめ各時代の土器や石器・陶磁器を多数発見することができ、当時の人々の暮らしやその地域での文化の形勢過程を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

調査にあたり、御協力をいただいた関係機関ならびに関係者の各位に対し厚く御礼申しあげるとともに、本書が文化財に対する認識や理解のため、また、研究の資料として活用されることを願うものであります。

平成5年3月31日

北方町教育委員会

教育長 河井行雄



鹿児島地区に建設された下郷団地(東日本建設局提供)

2. 遺跡位置図(1/10,000)



例　　言

1. 本書は、速日峰地区県営は場整備事業に伴い、平成4年9月1日より平成5年3月31日まで実施した埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、東臼杵農林振興局の委託を受けて、北方町教育委員会が実施した。
3. 現地の実測図は小野信彦・黒木小夜子・佐藤きみえ（北方町）が行った。
4. 遺構・遺物は小野が撮影した。
5. 遺構・遺物の実測・トレース等は主に小野が行い、佐藤きみえ・黒木小夜子の協力を得た。
6. 石材の鑑定に関しては、足立富男氏（門川町）・松田正利氏（延岡市）・宍戸章氏（宮崎市）の御教示を受けた。
7. 本書に使用したレベルは海拔高で、方位は磁北で示した。
8. 本書の執筆・編集は小野が行った。
9. 題字は木村重穂氏（北方町教育委員会）の揮毫による。
10. 出土遺物や写真・図面については北方町教育委員会で保管している。

目　　次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	
2.	調査の組織	
II	調査の内容	
1.	調査の概要	3
2.	基本層序	4
3.	遺構	4
4.	遺物	5
III	おわりに	6

I. はじめに

1. 発掘調査に至る経過

宮崎県東臼杵農林振興局では昨年度に引き続き、早中・早下地区での整備事業を実施するに、宮崎県教育委員会に工事予定地区的埋蔵文化財の有無について照会のを行った。これを受けて宮崎県教育委員会では、平成4年7月9日より10日まで工事予定地の試掘調査を実施し、3ヶ所で遺跡の存在を確認した。

北方町教育委員会はこの結果をもとに、東臼杵農林振興局と遺跡の取り扱いについて協議したが、工法変更等による遺跡の現状保存は一部を除き不可能となり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は東臼杵農林振興局の委託を受けて北方町教育委員会が、平成4年9月1日より平成4年9月31日まで実施した。この内の1ヶ所は宮崎県教育委員会によって調査が行われた。

また、バイパスの取付道路部分についても宮崎県教育委員会によって調査が行われた。

2. 調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

調査主体 北方町教育委員会

教 育 長 河 井 行 雄

社会教育課長 木 村 重 碩

事務担当 社会教育課長補佐 亀 長 駿

調査担当 社会教育課主事 小 野 信 彦

調査指導 宮 崎 県 文 化 課

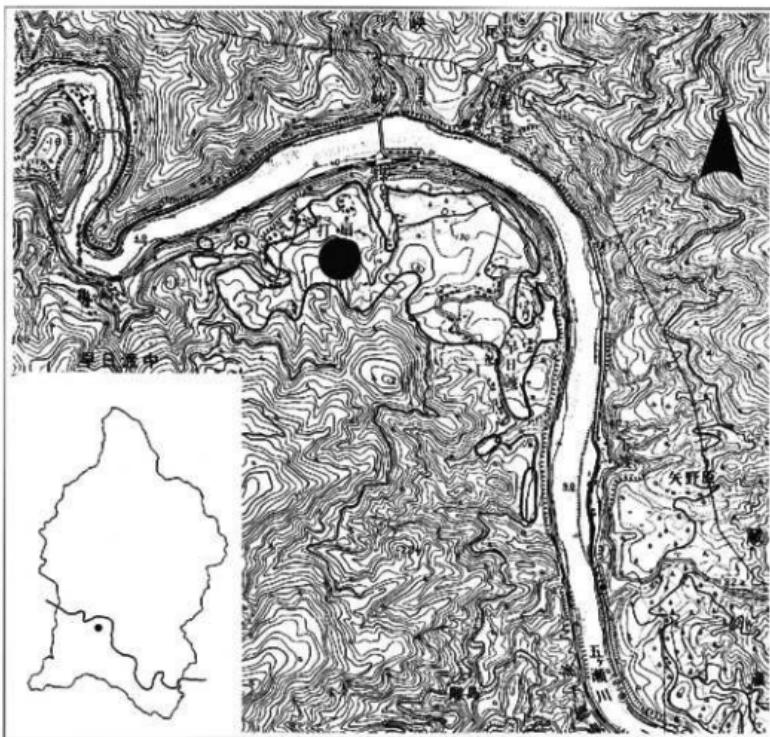
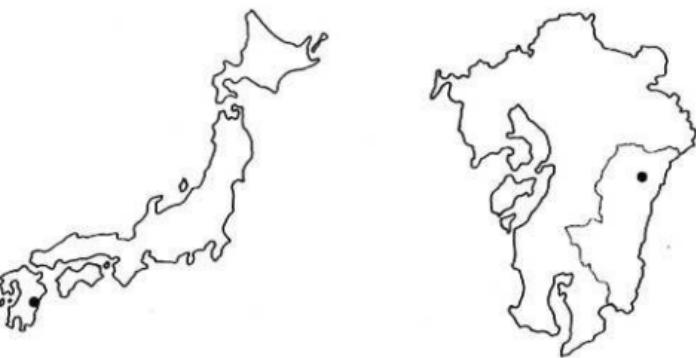
調査協力 (順不同)

宮崎県東臼杵農林振興局農地整備課、宮崎県文化課埋蔵文化財担当者各位

宮崎県市町村埋蔵文化財担当者各位、近藤協氏（宮崎県総合博物館）

永友良典氏（宮崎県埋蔵文化財センター）、沢皇臣氏（北川町）

速日峰土地改良区及び地元関係各位。



3. 遺跡位置図(1/25,000)

II. 調査の内容

1. 調査の概要

調査は、県営は場整備事業により切り土となるところを中心として調査区を設定し、各調査区にトレーンチを設けた。調査区は便宜上A～F区に分けた。

A区は宮崎県教育委員会文化課によって調査が行われ、方形プランの古墳時代の住居跡と時期不明の土塙各1基が検出された。B区とC区はかなりの急傾斜地であったが、アカホヤ層が削平を免れた部分が僅かに残っており、その下部に焼石群が検出された。焼石群中より縄文時代早期の遺物が若干出土している。その他、B区の西側では長方形プランの土塙が1基検出されている。

D区とE区は一部を除き国道218号線バイパス工事に伴う取付道路にあたるため県文化課によって調査が行われた。ここは、平成2年度に調査が行われ古墳時代の住居跡が合計11基検出されたII区～IV区と近接するため、その続きが検出されるのではと思われたが、大部分が削平され遺物包含層も失われていた。このため遺構は一部を除き検出されず埋土中より縄文土器や陶磁器が若干出土したに止どまった。F区は、以前から『五輪さん』と呼ばれ地権者によって祭られていた。調査によってかなりの石塔が出土した。

調査終了後、調査区の西側の墓地に移転復元を行った。



4. 調査区位置図(1/3,000)

2. 基本層序

基本層序は以下の通りである。

I層…表土若しくは耕作土（約10cm）

II層…茶褐色土若しくは埋土（20cm～80cm）縄文土器・陶磁器等が出土。

III層…黒色土層。バサつく。（約30cm）上部より主に縄文時代晚期の遺物が出土。

IV層…アカホヤ層（約10cm）B・C区に若干残る程度。

V層…黒褐色土層。やや粘質。（約20cm）縄文時代早期の遺物と焼石が出土。

VI層…黄茶褐色土層。粘質。小砂利を含む。

3. 遺構

焼石群

焼石群はB・C区の東端付近で検出した。大部分が水田造成時の削平により消失していたが、傾斜に沿って拳大の焼けた角礫焼石がある程度まとまっている。焼石を含む土は、ほぼV層と同じであるが、やや黒ずんでかたくしまっており、VI層上面に近付くにしたがって粘質になり色も黄色味を帯びる。焼石は南側のほうが厚く20cm程度堆積しているものの調査区の北端（傾斜端部）に行くにしたがって浅くなっている。

焼石群からの出土遺物は少なくチャート製の石鏃・スクレイパー・使用痕の認められる剥片・砂岩製の石皿と、押型文土器等が若干出土したのみである。

また、ある程度焼石が集中した部分を掘り下げたが、集石遺構を検出するまでには至らなかった。

土塙

土塙は、B区のやや東側で検出された。平面プランは長方形で長さ1.8m、幅0.5m、深さ0.7～0.8mを計る。底の中央部がやや狭くなる。埋土はII層（茶褐色土）の単層で炭化物が若干含まれる。遺物は出土しなかった。

石塔群

石塔は当初、調査区内の森の中に10基程寄せ集められた状態で、地権者によって祭られていた。伐採の途中、奥のほうに石塔がかなりの数積まっていた。移転した時点では、五輪塔・板碑・角塔婆等を合わせるとその数は、50基を越える。

しかし、表土を剥いだ結果では、地輪等が若干検出されたのみに止どまった。しかも、地輪の並びに規則性は見出だし得ず、壠込みや遺物などの出土もなかった。

このため、F区は当初から石塔群として存在していたのではなく、開発などによって周辺の石塔を短期間に寄せ集め、そのうちの幾つかが祭られたものと思われる。

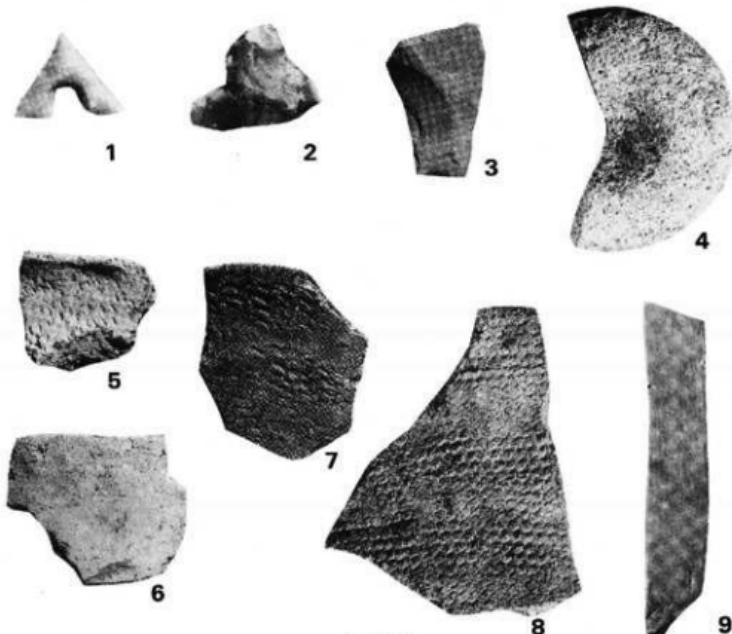
4. 遺 物

今回の調査では、B区及びC区より若干の遺物が出土したに止どった。その中でも、V層出土の遺物は8のみで、他はII層の埋土中より出土した。

1は抉りの深い縄文時代早期の特徴的な石鎌（鉶形鎌）である。2と3は、スクレーパーである。特に2は、直線的な刃部形成とつまみ部を意識した両サイドの加工より石匙とも考えられる。3は両辺に細かい加工が、弧部には使用痕が観察される。4は環状石斧の未成品と思われる。粗い敲打整形が見られる。両面から研磨されてあと1.3cmのところで中断している。火熱を受けている。石材は1と2がチャート、3は頁岩、4が砂岩である。

5は撫糸文土器で口縁端部はラッパ状に開く。口唇内部にも横方向に撫糸による施文が見られる。6は無文土器で口縁部は直線的である。横方向のナデが見られる。7と8は山形押型文土器である。口縁部は7が直線的であるが、8は端部が若干開く程度である。7には口唇内部に横方向に山形押型文の施文がみられるが、8は無文である。

9は頁岩製の砥石である。若干反る。両面とも入念に使用されている。



5. 出土遺物

III. おわりに

当初、本遺跡は調査予定地に入っていたなかった。しかし、これまでの調査の成果から、かなりの急傾斜地にも破壊を免がれた遺構が検出されたことと、平成2年度に発掘調査が行われて古墳時代の住居跡が多数検出されたII～IV区に近接することなどから、関係者と協議を重ね発掘調査を実施することになった。

調査の結果、急傾斜が始まる端部に古墳時代の住居跡が一基（県文化課による調査）、急傾斜の途中に焼石群2ヶ所の他、五輪塔を始め多数の石塔を検出することができた。

古墳時代の住居跡は、II～IV区で検出された方形プランのものとは若干趣が異なり、長方形プランで主柱穴が6で本あった。遺物も少なく、大まかに古墳時代としか判断できないのであるが、詳細は類例の増加と周辺地区的調査に期したい。

焼石群は、これまで平坦部若しくは台地の端部のかなりの範囲で検出されるのが普通であった。また、本遺跡では集石遺構は検出されなかつたが、今後この様な斜面部にもその存在が予想される。今回の調査は、これから急傾斜部分にも目を向ける必要が生じると共に、縄文時代早期の遺跡の在り方を大きく見直す契機になったと思われる。

F区の石塔群は、周囲から寄せ集められた可能性が強いとは言え、その数の多さが注目される。50基を越える中世の石塔が集中する場所は、笠下遺跡など町内にはそう多くの例はない。また、千枚岩使用の石碑状のものや砂岩礫に穴を穿ったものなど特異な石塔が見られること、角塔婆の多さ等も特異である。本遺跡の資料は当地域はもちろん、町内の中世を解明する上で貴重な資料になると思われる。



6. 作業風景



7. 調査区遠景（南より）



8. 調査区遠景（東より）



9. B区近景（西より）



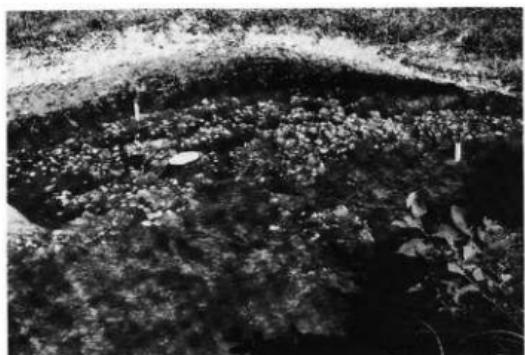
10. C区近景（西より）



11. E区近景（西より）



12. B区焼石群（南より）

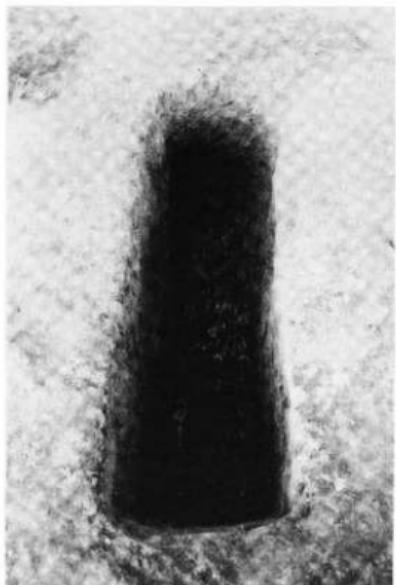


13. C区焼石群（西より）



14. B区焼石集中部
半載状況

15. B区土塙（西より）



16. F区石塔群（東より）





17. F区作業風景



18. 石塔検出状況（南より）



19. 石塔復元作業



20. 復元完了状況

速日峰地区遺跡Ⅲ

発行日 1993年3月31日

編集・発行 北方町教育委員会

印 刷 クラフト印刷

宮崎県東臼杵郡北方町字4146
電話(0982) 47-3210番